

第8回「県政ひざづめ談議」概要

- 開催日時：平成19年8月27日 16:00～
- 開催場所：山梨市 萩原フルーツ農園直売所

〔司会〕

今日はお暑い中、お忙しいところお集まりいただきましてありがとうございました。
ただいまから、知事対話『県政ひざづめ談議』を始めさせていただきます。
本日の進行を務めます、県広聴広報課、田中です。よろしくお願ひいたします。
それでは、初めに横内知事からごあいさつをお願いします。

〔横内県知事〕

皆さんこんにちは。横内正明です。

今日はお暑い中を、またお忙しいところをこうしておいでをいただきまして、本当にありがとうございました。

今日は、有機農法を山梨県でやっておられる皆さん方にお集まりをいただいたということでもあります。

言うまでもなく、食の安全というものが大変に注目されている中で、有機農法、有機栽培が、農業の分野の中で確実に大きな地位を占めつつあることは言うまでもありません。

私の家内も有機農法、あるいは減農薬の野菜なんかをいつも買っているわけです。

しかしそうは言っても、なかなか普通の家庭の奥さん方に聞いてみると、どうもやっばり虫の食った跡のついたキュウリは嫌だとか、形が曲がったキュウリは嫌だとか、本当は虫の食った跡のついたキュウリのほうが値段が高くなるぐらいでないといけないわけですが、まだまだ消費者の間に今一つ認識が十分できていないんじゃないかなという感じがしております。

しかし、有機栽培、有機農法が農業の分野の中で大きな流れであることは間違いないわけでありまして、県政の分野でもまだまだあまり一生懸命取り組んでいるとは正直言って言えないわけですが、その辺のご不満も含めて是非皆様方のご意見を聞かせていただければありがたいというふうに思っております。

そんなことで、今日はざっくばらんに日ごろお考えになっていることをお聞かせをいただければありがたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

今日はどうもありがとうございました。

〔司会〕

本日出席しております県の担当職員を紹介させていただきます。

まず、県の農政部で農業試験研究などを担当しております山本農業技術課長です。

同じく、農政部で農産物の流通などを担当しております西島果樹食品流通課長です。

それから、県の企画部で食の安全、食育の推進などを担当しています斎藤食の安全・食

育推進室長です。

それでは意見交換に入りますが、今日は県内の有機農業を推進されている皆様方と、『やまなしの有機農業の未来について』をテーマに意見交換をいたします。

最近の食の安全・安心への食品意識の高まり、それから環境保全型農業の展開などの観点から、有機農業推進について参加者全員で話し合いを進めていきたいと思っております。

本日いただいた皆様のお考え、それからご意見は今後の県政の参考にさせていただきます。

それではご発言をお願いいたします。

[参加者]

私は、有機農業をやって50年、完全無農薬になって40年という歴史の中で、約二十年近く前に市民の会を立ち上げました。

そして、当時百何十人という方がお集まりをいただきました。実際にやっている方、それに消費者も入っていただいて、ところが段々段々会員が減ってきてまして、現在約半分以下になっております。

なぜなったかということが一番大きな問題で、今ここにおられる人たちと一緒に色々なことを努力し合いながらやってきたんですが、どうしても我々の考え方が先行しているから、全体がついて来ないということも言われておりました。

ところが今度知事さんが変わられて、まず農業が大事だということをお聞かされたことにお聞きして、私どもものすごく嬉しく感じました。

願わくは、有機農業の法律に基づいたようなこともございますが、行政と生産者と消費者と流通と、そういう人たちが全部一緒になった委員会みたいなものを構成していただいて、そこで今後の有機農法の進め方についての具体的なことを検討していただいたら、より良き農業の展開ができるのではないかと期待申し上げておるわけでございます。

本当にお忙しい中を、わざわざ有機農業、先ほどの知事さんの言葉の中にありましたように、本当に些細な物のようにしか見えなかった物が、こんなに大きく取りあげていただいて本当にありがとうございました。

[参加者]

私も観光農園をやっているわけですが、お客様が国のキャンペーンもありまして、品質をすごく吟味する、それと同時に、直接農園に来て色々な栽培技術をたずねる方が、非常に多くなったんです。

「これはどういう作り方をしているんですか」「農薬はどうしたらいいんですか」と、そういうことをすぐ聞かれます。

私も、やまなし自然塾を通して有機農業に多少絡んでいるんですけども、実際の農薬が半分ぐらいになりました。

今年の状況からしますと非常に病気、例えばブドウでは晩腐病ばんぷびょうとかいうのが多いわけで

すが、今の品種の体系でいくとなかなか農薬を減らしていくことは難しい、そういう感じが否めないと思っています。

そこで是非お願いしたいのは、病害虫に強い品種改良を、育種を是非やっていただきたい。

どちらかというとい県の果樹試験場では、品質の良いのが主体だと思うんですが、それも大事なんですが、やはり農薬が少なくても消費者に受け入れられるというものを、是非考えていただきたいと思います。

〔知事〕

病害虫に強い品種改良ですね、果樹試験場じゃどうでしょうかね。

〔農業技術課長〕

元々果樹試験場でも、ベト病などに強い醸造用ブドウを作るということで、それは一つの大きな狙いでやってはきているんですが、なかなか今ここに持ってきていただいたような、完全に無農薬にするというようなものまではなかなか作れない。

どちらかという、狙っているのがワインの品質と合わせてということなので、無農薬にしてもワインの品質にどうなっているか、そここのところのバランスを取っていかないといけないものですから、なかなか病害虫だけというわけにはいかない。

ただ、日本の気象条件の中でも、病気が少ないような品種を作ろうということに今努力はしております。

〔知事〕

これ（ブドウ）は、もう有機のマークがついていますから、有機農業ですよ、これね。全く無農薬で・・・。

〔参加者〕

無農薬です。

〔知事〕

化学肥料を全く・・・

〔参加者〕

全く使っていません。

〔知事〕

これはしかし手間は倍ぐらにかかるとでしょう。

〔参加者〕

いや、そんなにかかりません。考え方の問題なんですよ。

しかしもっともっと本当の問題は、農薬のこともさることながら、化学肥料の問題。今

環境汚染、土壌汚染を一番進行させているのは化学肥料なんです。

あまり大きい声で言えないんですが、化学肥料は減らしてもできるんですよ。私どもの全国の会員は、もう何割かは化学肥料は全然使わなくて完全な製品を作っています。ですからそれはできるんですね。

そうして、農薬もできるだけ減らしてやればいい。

先ほどちょっとお話が出ましたけれども、ワイン用の品種も、農薬をかけなければワイン用のいい品種が出ないような印象を、今のお話では受けます。はっきり申し上げて逆です。

ワイン用でも、フランスの一番いいものは完全無農薬なんです。これはもうはっきりしているんです。学会、世界発表になっていますから。

ですからやればできるんです。ただ道のりは遠い。

だけど、やれるものからどういうふうにやっていくかということだと思っんです。

それからもう一つは、先ほど知事さんが指摘されました認証の問題なんです、一番難しいのは果物で、特に農薬が必要なんです。

これはやむを得ないことなんです。ですからできるだけ低農薬にする。

これは是非検討・研究していただきたい。そして無用な農薬をかける必要はない。

最近SS（注 スピードスプレーヤー：農薬噴霧機）が使えるようになったら、農薬が余分にかかるんです。SSが開発されたのは、農薬を使う量が少ないということだったんですが、実際は使う量が倍にも3倍にもなってしまう。

ですからそういう経費は省く、そしてまた安全な物を作るような、一つ是非指導のほうをお願いしたいと思います。

[参加者]

甲州市塩山でブドウを作っております。

10年ほど前にやまなし自然塾に入らせてもらって、減農薬、また有機栽培ということで堆肥を中心にブドウを作ってきたわけですが、最初の3、4年は本当にうまくできたんですよ。

だけどここ3～4年、品質も落ちてきたし、数量も減ってきた。

なぜそうなったかという原因は色々あると思うんですが、私自身で土壌検査とかをやっていますが、堆肥中心でしたもので微量要素が畑になかったということが、原因ではないかと私自身思うわけですが、そんなことで県の果樹試験場で有機農業のモデル地区を作っていただきたい。有機栽培を始めると同じ悩みが、必ず3、4年たって出ると思うんです。

そういった時に時間をそこで費やすより、早い答えが出せれば、これから有機農業を始める人には本当に入りやすいんじゃないか、そんなふうに考えていますので、是非そんなことを考えていただきたいと思います。

[参加者]

私は、牧丘町倉科にフフという施設がございしますが、その周辺で山林種苗を5～6反ぐ

らいしています。

畑も1町歩ぐらいありますが、その中で有機農業をやっている次第でございます。

今日、私は知事さんに提案というか、お願いをいたしたいと思うことが3点ございます。

まず1点は、有機農業認定推進のための施策の充実。

そして2点は、有機農業に関する指導者の育成。

第3点は、安心、安全、環境を守る食の提供という視点から、学校給食や公共施設における有機農産物の使用推進についてをお願いでございます。

これも、私たちもとてもまだそういう生意気なことを言っても、学校中提供する力はまだございませんが、徐々にそういうような仕組みになっていただければ、大変ありがたいなと思っております。

以上、3点をご提言したいと思っております。よろしく申し上げます。

〔知事〕

有機農業の認定というのは、山梨ではまだ20人ぐらいしかなくて、なかなか増えないんですね。

難しいものですから、非常に。

減農薬はエコファーマーとか、そういう方は大勢いますけれども、有機栽培となると難しいようですね。

〔参加者〕

書類を整えたりとか、あと認定料がかかるとかということで、非常に高いハードルがあります。

〔参加者〕

完全にその2点なんですね。

実際にやっている人はかなり多くいます。

でも、さあ認定をとると書類を作れ、認定料の問題、その辺の問題が出てきていますから・・・

〔知事〕

やっぱりこれはJASの認定になるわけですね。

だから難しいですね。

給食に使うというのは確かにまず考えるべきことですね。食の安全食育推進室長はどうですかね。

〔食の安全・食育推進室長〕

先ほど言われたように、絶対量として非常に少ないという部分があったりしますので、今現在の取り組みとすれば地産地消といいますか、地元で採れたものをその地域の物とし

て使っていくというふうな考え方で、各学校給食などでの取り組みは行われています。

有機だからという部分ではなくても地産地消とか、そういうきちっとした作り方なり、そういうものが分かるような形の農産物を使っていくというのが、今大きな流れとしては出てきています。

〔知事〕

私のところにいつも野菜をくれる人も言っていますが、昔は野菜も売っていたけど今は腰を痛めて家族が食うものしか作らない。

そうすると農薬をうんと減らして安全なものを作る、売っている時はものすごくまいたと言っていましたけれどもね。そういうことがあるんでしょうね。

そういうものが子供の口に入るとうまくないですよ。

〔参加者〕

極端な言い方をしますとアトピーがものすごく増えたでしょう。

原因は、恐らく70～80%、90%がそれなんです、食の問題からですね。

〔参加者〕

余談ですが、今、杉花粉という騒ぎがありますけれども、それも私たちの子供の頃はそんなことはなかったような感じがするんですね。

特に今、やっぱり体質的にこういうふうな弱点がでた。

食の問題で、そういうものも多少あるじゃないかと私は思っております。

〔知事〕

そうかもしれません。

少子化の原因も、やっぱりそういうことがあるいはあるかもしれないと言いますよね。

〔参加者〕

高根町で25年前から有機野菜を作っています。

元々はサラリーマンで、25年前から農業を始めました。

私自身、農業外から農業を始めたということで、担い手の問題をずっと25年間県などと一緒にやってきたわけですが、なかなか県の方で具体的に一步が踏み出せない。

というのは、「新農業人フェア」というのが東京で年に2回ぐらい、大阪で2回ぐらい、年に4回ぐらいあるわけですが、今はサラリーマンをやっているんだけど農業を是非やりたいという人が、そのたびに1,500人ぐらい集まるんです。

山梨県も、そこでブースを開いて農業大学の説明だとか、色んな研修制度の説明などをするわけですが、なかなか具体的に進まない。

そういう理由の一つは、農業をやりたいと思っているんだけど、本当に農業をやっているかどうか自信がないという、そういう人たちの研修の場を作ってあげることがなかなかないということで、是非そういう場を作りたい。

というのは、今、研修だということで農業をやりたい人を僕なども受け入れるわけですが、直接農家に来てしまうとその人が向いてない時に「お前、向いてないからやめろよ」と言わなければならない。それは非常に辛いです。

だから、できれば何人かで合宿でもしながら農業の体験をしてもらって、その中で自分で俺は農業に向いてないと思った方には諦めてもらって、俺はやっぱ農業をやりたいという人を、農家に研修として出してもらえるような制度ができれば、今の担い手の問題も解消していくんじゃないかなというふうに思います。

果樹地帯も、今恐らく農業を支えている人は70代ですか。

高根の方では、もう養蚕もなくなって田んぼを細々とやっているだけです。

そういう状況なので山梨県の3年後、4年後の農業を考えると、この担い手の問題を真剣に考えていかないと大変だな、有機農業の未来もないというふうに思います。

よろしく願いいたします。

〔知事〕

よく分かりますよね。

確かに、都会で非常に農業をやりたいという人が、それは単に仕事としてというよりも、むしろ健康だとか、あるいは趣味としてということが多いようでしてね、河口湖の町長が言っていましたけれども、ブルーベリーか何かの農業組合を作って募集したら、半分以上が都会から集まってきたということをおっしゃっていましたが、そういうニーズとか、そういう人は多いんですね。

やっぱり自信が持てないということですかね、一番の制約は。

〔参加者〕

外で見ているのと実際にやる農作業、あまりにも開きが大きいので、だから実際に体験してもらうのが一番です。

〔知事〕

今度、長坂の農業大学校を大きく変えたんです。

今までは、いわゆる職業訓練校だったんですが、今度は学校法人の学校にしたんですけれども、3年の長いものとか1年とか、そういうコースがもちろんあってもいいですが、もう本当の高度な農業者を育てる。

また、趣味の農業をやる人とか、そういう人でも短期に入れるような、そういうコースも当然あってもいいじゃないかと。

だから色々なコースを作って、1週間のコースとか1カ月のコースとか、そして、色々な形で農業に関心のある人が、そこで学べるようにしたらいいだろうというようなことをおっしゃって、何にしてもやっぱり農業が好きの人が、どんどん集まってくる千客万来の学校にしようと言っているんです。

〔参加者〕

山梨県でも、ウィークエンド研修、勤めながら週末だけ研修するという制度があるんで

すが、それなども延長した形で、どこかに何人かが宿泊できるということが大事です。

結局どこに泊まるかという、泊まる所がないんですね。

だから気軽に研修するのに、県の農業大学校の寮を使わなくなるようですので、そういう遊休施設か何かを使えることも考えてもらいたい。

〔知事〕

それは考えていきたいと思えます。

〔参加者〕

私は生産者じゃなくて、消費者の方です。

私共も、これからの食の安全ということでは取り組んできたんですが、まだまだ消費者の生産者への理解、特に有機農業に対する理解というのは非常に薄いということで、今回、有機農業推進法ができたということで非常に食の安全、安心を進める立場として心強いというふうに感じています。

特に有機農業につきましては、生産者の方のご苦勞というのが、流通をやっている中で非常に感じるところでございます。

そういう意味では、今後県内で有機農業を推進するにあたっては、この有機農業に取り組んでいらっしゃる皆さんを有効に活用していただきたい。

そして是非早急に、有機農業が県内に広く広がるシステムを作っていただきたいということです。

それと、食育なり環境教育の中で、やはり有機農業の持っている素晴らしさですね、薬を使わないことによって虫や何かの命が繋がっていると、人とも繋がっていくというような、そういう教育も取り入れていっていただきたいというふうに思います。

それとあと先ほど出ましたが、地産地消という中では、是非小学校の給食に県内の野菜を使っていたきたい。

特に学校給食につきましては、野菜関係も中国から輸入の農産物が非常に多くなっています。

消費者も、外国からの野菜について非常に不安を持っているということなので、今回の有機農業の推進を県内の農業を見直す一歩として、踏み出していっていただきたいというふうをお願いをしたいので、よろしくお願ひいたします。

〔知事〕

分かりました。

学校給食などは、指定管理者などにすると大きい企業が入ってきて、どこから野菜が採ってこられたのか、分からないような時がありますからね。

〔参加者〕

消費者です。

有機農業ということを知ってから10年以上経つんですが、子供が小さい時に農家にお

願いして交流の場を持ったり、お手伝いの真似事みたいなことをさせてもらったり、そういう経験があるんですが、野菜嫌いな子が、すごく喜んでありがたく食べるようになりまして、そういう効果もあるななんて思いました。

あと食の安全も、中国産の農産物や加工食品会社の不祥事などの報道で、職場などで話をしていても「安いは安いなりだったね」というような言葉が、普段有機農業をそんなに意識していない人でも、そういう風に思うようになってきたんですね。

ですから、信頼できる農家は信頼はしたいし、加工する人も信頼して私たちも買いたいなという思いはすごく強くなりましたので、是非そういうところは大事にしていきたいなと思います。

〔知事〕

分かりました。

〔参加者〕

消費者でもあるんですが、有機農産物やそういうものを使ってお料理とか仕出しとか、色んなオードブルとかパンやケーキなどを焼いているんですが、やはり材料を仕入れるのに苦労するんです。

冬場などは何も野菜がなくなっちゃったりもするので、全国的にこの有機農業推進法によって有機農業を支え、盛り上げて下さり、是非、有機農業推進マーケットというか、法的な施設でマーケットを作っただけですと、いつでも仕入れることができますし、学校給食などもそういうところからも入りやすくなるのではないかな、というふうに思っております。

〔知事〕

有機のマーケットをですね。

この間も日曜日のNHKでやっていましたけれども、企業で有機農法じゃないですけど、その会社で一定の減農薬の基準を作って、それで農家に作ってもらったものを宅配する、それで非常に発展している会社がありましたね。

なかなか役所が作ると、大体うまくいかない場合が多いですから、そういうご商売をする、山梨県内でも「らでいっしゅぼーや」みたいなものをやったりとか、あるいは「コープやまなし」さんとか、そういうところでやっていただいて、そういうものを県としても色んな形で支援するというのが本当は一番いいんですけどもね・・・。

そうですか、まあ考えてみますから。

〔参加者〕

やまなし有機農業市民の会の会員で、豚を放牧でやっぴましてそろそろ30年になります。

豚を放牧したのは全国的にも珍しいですし、完全な形で生まれてから出産、出荷まで全く添加物とかを使わなくてやっぴましているのは、多分全国の中で私だけだと思っています。

そんな関係上、食品リサイクル法などができる前に、15年間ぐらい学校給食の残りを全部引き取ったことがあるんです。

もうその時から、学校には分別をお願いしたり、そうすればこういうふうに取り取ってやりやすいとか、全部こちらからノウハウを提供しながらやってきたんですね。

それが今から4、5年前に、食品リサイクル法ができて突然話が終わっちゃいまして、各学校に残飯処理機ですか、要するに発酵で処理するものが入ったわけです。

その費用も、人伝えに色々聞きますと例えば800万、それにあと発酵菌を購入して、そして発酵させるためには水分を飛ばさなければいけないので、電力で飛ばすということで、ランニングコストもものすごいと思うんです。

それに比べて私どものやり方は、その日の内に出た物は夕方全部取り取って、そしてその日の内に豚の方に与えてしまうという、要するに運搬費だけですね。

これは一番コストもかからずに、それからそういう食べ物の利用という点ではいきなり堆肥にするんじゃなくて、まず動物の餌にできるものは動物の餌にして、そしてその後から堆肥にしてもいいわけですね。

でもそういうことが結局飛んじやって、いきなり、食品リサイクル法で官から率先してやるんだみたいところで多分押し進められた事業だと思うんですよね。

これは、ずっと私自身合点がいかないんですよ。

そういう意味も含めて、やっぱり学校給食の問題点とかすごいあるんです。

また、食育という意味では、時間がなければ給食の時間が減らされたりとか、子供たちの偏食というのは例えば魚、骨がついているともうまるっきり食べない、それからスイカは僕らの頃だと白くなるまで食べるのが当たり前だけれども、真ん中の赤い部分だけちょこっと食べるだけ、女の子はかぶりつくのが格好悪いからといって食べたくても食べないとか、これは食育の話ですね。

そういうことを含めまして、もう先程来話が出ましたけれども、学校給食の中で地産地消も含めまして、取り入れてもらうというのはすごい必要だと思います。

例えば、一つの実験ケースとしてどこかの学校でやってみる。

僕らの供給側としてもなかなか揃うものではありません。それから、補助金なしではとても価格的に合いません。そういうことを含めまして、問題点がいっぱい出てくると思うんです。

そういう中で有機農産物を作る意義といいますか、なんでわざわざ有機農業なんだという、普及という意味でも、一つの実験みたいな格好で何かできると面白いんじゃないかと思っています。

【知事】

給食で実験的にでも・・・、なるほどね。

【参加者】

笛吹市の一宮町でモモを主に栽培をしているんですが、私も30年ぐらい前から農薬を20袋も使うモモ作りはだめだと。

そんな関係で農薬を減らしながら、なるべく零に近づきたいという希望でもってずっと

やったんですが、これが難しくて、ほとんど3年に1回ぐらいは全滅するんです。

点々とそういった試みを行っている人は大勢いると思うんですが、何とかそういう人たちを統合して拠点整備といいますか、私たちと行政側のほうも一緒になって、有機開発なり圃場整備なりしながらやっていただけたら、大分進むんじゃないかと思うんです。

もう一つは、有機農業の使い方として、知事さんはよく東京に行って企業などの誘致をされていると思うんですが、企業の誘致はなかなか条件が揃わないとできないと思うんですが、その企業の中の福利厚生の部分で、山の方とか、環境のいい所とか、水のきれいな所とか、そういった所への誘致は可能ではないかと思うんですね。

これはやはり、有機農業にぴったり合うというんですか、大勢の人を取り込みながら、今のモモの栽培はもう完璧なものでないと流通には乗らないんですが、手頃のものであったり、少しは傷がついたり、そういったものをそういった福利厚生の部分だったらマーケットというか、お金じゃないですから、そういうところだったら取り込みやすいといいますか、そういう人たちを誘致しながら、色んな中山間地の農業を変えていくという方法を取ってもいいんじゃないかという考えを持っています。

〔知事〕

そうですね。福利厚生施設みたいなものの誘致を、一時期は山中湖などにずいぶんたくさんあったんですが、今はもう少なくなっちゃいましてね、企業の福利厚生というのも会社が自らやるんじゃなくて、どこかに委託したりとかそういうものがまた多くなって、なかなか保養施設みたいなものを作らなくなったものですから・・

〔参加者〕

これから食べ物の安全とか、環境問題とか、そういったものがクローズアップされてくるのに、山梨みたいな、こんなに東京に近くて地の利の良い所はないんじゃないかと思うんですね。

特に、有機農業とか福利厚生とか、これからはそれが大きくクローズアップされてくるような感じもするんです。

〔知事〕

なるほど、分かりました。

〔参加者〕

食品製造をやっています。

農業でせっかく作ったもの、特に有機農産物というのは、非常に製品率が低くて不良品が多いんです。

不良品というか、青果として出せないものに、いかに付加価値を付けて市場に送り出すかというのが我々加工の仕事で、その辺で応援して色々商品づくりをやらせてもらっているんですけども、作ったものを捨てない、それから青果というのは1年の間でも本当に1週間、2週間ですが、我々が手をかけて原料化すると1年あるいは2年使えるんですね、製品化できるものをうまく活用するということ。

あとは、生産者それから流通消費者、加工も入れる中で、一つのチームを作り、実際の声を聞きながら一つの流れを作って、実際に行動に移す移さないは別ですけども、取り敢えずのモデルケースというものを、机上でまず作り上げることがいいのかなと思うんです。

そして今流れとしては、中国農産物がもめていますので、国産の農産物の人気が非常に高まっています。けれども、日本が40%を切っている自給率の中で、有機栽培の農家を一軒でも増やしていくには、有機農業というのは一般のイメージからいくと、苦勞ばかりして稼げないというのが一応イメージなんで、そうじゃなくて有機農業のほうが、今の農法よりは少しでも多くでも稼げるんですよという形を作っていくかないと。

[知事]

今もプリンだとか杏仁豆腐をいただいて、これ大変おいしかったんですがね。これはいかがですか、これは市場に流れているんですか。

[参加者]

一応知る人ぞ知るだけの話で、まだ大々的にやる気がないものですから。

[知事]

そうですか。まだ試験的にやっておられるんですか。

[参加者]

もう本当にテスト的にやっています。

ただゼリーに関してはもう「らでいっしゅぼーや」さんが取りあげてくれていますから、「夢市場」さん、それから「人参クラブ」さんも来年もやらせてほしいということで、多少なりとも増えていく予定はあるんですけども、ただ一つの問題は、例えばブドウもゼリーの中に一粒入れているんですよ、皮ごと。これ有機栽培、減農薬だから丸ごと使えるのであって、これは一般栽培では使えないですね。

ところが生食として売るほうが値が付くものですから、原料に回ってくるというのはよっぽど、例えば今年みたいに病気が出たってことでないと出てこないわけですよ、原料が。そうすると安定的に入らない。

だから一つの方法は、原料用の農産物を作ってくれるような環境を作るにはどうするかということと、あとは結局加工すると日持ちしますから、例えば今年みたいに天候が変で病気が出たなどという時に、ある程度原料として出してもらって、例えば2年分とか、作り込んでしまおうとか、そして良い時は全部生食で出してもらおうとかということも可能なんですよ。

そうすると最初の生産調整のためにもなる。要するに捨てないですみますから。

普通だったら、もう病気になったものは全部パーですからね、一銭にもなりませんから。

〔知事〕

確かにね。加工食品というのはその点が良いですね。

〔参加者〕

農産物を製品化するという立場から、お米とお酒という立場からお話をさせていただきますと。

もう10年ほど前なんですけど、全国の酒屋で有機農法でお米を作って、それを製品にしようという取り組みをしましたが、平成11年に新JAS法ができた時に、その認定を受けるということでお米の値が倍になるという、生産者のほうからそんなお話がありまして、さらにそれを加工するという時には、もうお酒造りの道具から何から、もうみんな別にしなさいという規定もあったり、また認定を取る認定料とか査定料の問題がありました。

うちではそういう方向で進んでいたんですけど、そうすると価格にいつてしまうので、それだったらやめようということでやめたんですけど、同時に地元で独自にお米作りを始めまして、主人に有機農法というか、ある程度知識があったものですから、酒米を作るにあたって、からし菜というのがとても葉っぱに栄養があるので、それを敷き込んで緑肥にするというので、あとは近くの養鶏場から鶏糞をいただいて、肥料を使わないでお米作りを始めているんですけど、うちとしてはもう認定を取ってどうということよりも、皆さんにそういうことをしているということを知っていただくことが大切なんじゃないかということで、お花というのは見た目もきれいですし、有機ということもありますし。

〔知事〕

田んぼにまいているわけですね。

このからし菜は売れるんですか。

〔参加者〕

売れないです。全部敷き込んでしまうんです。

ただ食べてすごくおいしいですね。

〔知事〕

だけど、そういう有機の努力をしてこられて制度になったとたんに、認定だ何だで、手間と金がかかって止めざるを得なくなっちゃうというのは、誠に皮肉なものですね。

〔参加者〕

一番山梨県の大事なことは果樹が中心なんですよ。

果物というのは、明治以後日本に入ってきた、そうするとその中で農薬ありき、化学肥料ありきという考え方がまず先行してるんですね。

そういう面から有機の問題が扱い難くなったということが一つと、もう一点は山梨県は単位面積当たりの使う肥料の量が全国一なんです。

〔知事〕

それは果樹だからでしょうかね。

〔参加者〕

そうなんです。

実際にははっきりした数字はとらえようがないんですが、山梨県が何年か前ですか、化学肥料は半分にしようという運動を起こしましたよね。私は非常に感心しました。大事なことだと思うんです。

私に言わせれば半分でもまだ多いと思うんですが、農薬はある程度まではやむを得ないものがあります。

ただ、化学肥料は先ほども申し上げましたように、私がブドウ作ってキウイフルーツ作って、化学肥料一切使わなくて30年40年来てますが、全然生産量は落ちません。

ですから先程、ちょっと微量要素の問題が出ましたが、完全な有機質を使っていけば微量要素欠乏は出ない。

出たら世界の二千年・三千年という農耕地の農業がなくなっているはずなんです。

百何十年前までは、世界中全部が有機農業だったんです。

ですから私は、百何十年前の原点にまず戻って、どんどん戻そう。そうすれば日本の農地の中でもって食料の自給ができるはずだ。

〔知事〕

そうまで言うというのはやっぱり栽培技術、長年の50年に亘る栽培技術なんですね。ここでこうやれば良いとか、そういうものがあるんですか。

〔参加者〕

あります。

ただ、モモの場合には「これとこれとこの農薬だけはしょうがない、モモの無農薬は無理だ」ということは私も言っていて、だからこれは、認定制度の中で国の方で認めてもらう方法を講ずるよりしょうがない。

しかし、今の認証制度の中で、はっきり申し上げて使わなくてもいい農薬が許可になっている、認められる。どうしても欲しいというのは許可になっていない。

そういうふうな問題を、今度の有機農業推進法を盾にして、県なんかで色々実際に裏付けを取りながら国の方へ要望して、こういう果物や、こういう地方ではこれだけはしょうがない認める、まだ使っても良いよ。

やはり、そこまでやるべきだと思うんです。

そういうことを是非、山梨で。

非常に大変だと思うんです。難しいことだと思うんですが。

〔知事〕

果樹ですからね。野菜ならば割と可能性は高いかもしれませんが。果樹というのは難し

いと言いますね。

[参加者]

例えばブドウなんかは、消費者にはっきりした罪があるんです。例えば、そこにある失礼な言い方になりますけれども、藤^{ふじみのり}稔、これを買いに来た時、「ジベレリン処理してあるね」と言われて「そうですね」といって、これが高く売れば農家とすればやるわけなんです。

そんな事良いことじゃないんですよ。

国によってはジベレリン処理は禁止しています。20年ぐらい前にソビエトはもう禁止している。

ですから、各地方から持ち上がって行って国が、方向を変えていくような展開をしてもらえれば、息の長いことですがこれは大事な事じゃないかと思います。

[参加者]

自然塾メンバーで、今日は3人で伺いました。

白州で、子供の学校と教育農場をやっています。

1983年からですから24年間になりますけれども、今の農場のほうは鶏が5、6千羽と、和牛が5、6頭。それと5～6町歩ぐらいの畑をやっています。

一応、農法としては子供が畑に入って野菜を食べるので、創立以来ずっと無農薬でやっています。

家畜と野菜については、教育資源として使っていこうというのが最初からの動機だったものですから、教室と教材という考えで農場を運営しています。

今年は無機認証を申請して、510アールに認可がおりました。

[知事]

年間の人数は。

[参加者]

延べ年間2千人強ですね。

春と夏と秋、冬の学校がありまして、あと『身にしみて白州』という企画があって、5月の連休と夏休み終わってからですね、学校が終わってから宿題をやりながら農作業をして、尾白川に行って遊んでいるという企画が年間2回あります。

大体それで、大人と子供で延べが2千強でしょう。多い時で2千3百超えますけれども。

でも大人といっても、子供たちの父兄は参加禁止ですから来ません。

だれそれが来て、だれそれが来ないのは不平等になりますから。

[知事]

これはもう全国、もちろん東京とかその辺からも来るわけですね。

〔参加者〕

東京と大阪です。

大阪の生協とは、自然塾もそうですけれども産直をやっているんですが、産直をやるにあたって教育運動と一緒にやろうということで提携して、大阪からは大人を入れて70人～80人ぐらいが、4泊5日に来てやっています。

〔知事〕

白州にそういう塾があるとは知らなかったですね。

〔参加者〕

私は県外の出身者なんですけれども、学生時代に白州郷牧場での教育活動にボランティアで係って、そして今こちらで農業をしながら、主に担当は白州郷牧場の野菜の物流営業窓口をしているんですが、それと「きららの学校」（注 子供向けの農場体験教室）の事務局をしています。

今日は、有機農業の未来ということがテーマで機会をいただいたんですが、有機農業には安全な野菜を作るとか、景観を守るということもあるんですが、そのほかに人を育ててくれるという面があって、そこに未来を感じながら、これからも農業をやっていききたいなと思っています。

〔知事〕

この白州郷牧場というのは、合計で何人でやっておられるんですか。

〔参加者〕

7、8人。

〔知事〕

7、8人で、ああそうですか。

〔参加者〕

高齢者の方とか、村のおばさんたちがパートで。

〔参加者〕

あと、夏休みになるとOBたちが来ますし、学校の先生たちが休みになるので。

〔知事〕

休みになるから応援に来たり、素晴らしいことですね。

〔参加者〕

同じく白州の「きららの学校」の事務局をやっております。

この「きららの学校」で結構重視しているのは食育でして、子供たちが畑で自分たちで

種をまいたり苗を植えたりして育てて、それをまた収穫して、今度はそれを調理して、またそれを食べてみると、そういう一般の有機農業の流れの中での食育というのがかなり重視されています。

有機農業というのは農業だけの社会の問題だけじゃなくて、地域社会ですとか教育とか、さっき後継者の問題もありましたけれども、全て社会全体の流れの中で考えていかないと、農業の世界だけでがんばろうと思っても、無理があるんじゃないかと思うんですね。

そういう社会とか教育とかを、子供たちと一緒に考える学校がこの「きららの学校」だと思います。

〔知事〕

白州というと、有機というか、何かやっぱりそういうようなものに適したような雰囲気があるんでしょうかね、風土が。

〔参加者〕

白州の横手とかも、農地はどんどん荒れてきて、大きな土手は管理できないですから、作ってくれと言われても僕らもできない。

だからそうかといって産業もないですし、産業を誘致したとしても労働力がいないですし、そういう意味で僕らだけで話してきたことなんですけど、自然環境まで含めると非常に山梨は豊かですから、そういう意味で教育立村みたいな感じでこの集落が生き残れないだろうというふうに考えているんです。

〔知事〕

なるほどね。分かるような気がしますね、確かに。

〔参加者〕

中道で農業をやっております。

20年前ですかね、このままの農業では放ってけないという野心が芽生えまして、県内の有志を40～50人募りまして、「やまなし自然塾」という組織を立ち上げました。

その時に確認したのが、これからの農業は有機農業だと。

農薬とか化学肥料は使わない、そういう世の中になるんだということを鉄則の下に勉強会を重ねてずっとやって参りました。

その勉強会も段々発展しまして、公開講座というシステムに拡大しまして、白根の桃源文化会館とか、中道の風土記の丘とか、色んな場所で公開をして、年に1度の秋のお祭りに県民に広く勉強をしていただきたいということで、ずっと繋げてきたのが発展して参りました。

それで、どこでどういうふうに我々の活動を耳にしたのか、東京の銀座では是非山梨の活力ある農家の姿勢を何とか表現してくれないかということが3年前にありました。

〔知事〕

ああそうでしたね、トラックで何か持って行ったと言っていましたね。

〔参加者〕

そうです。

それで、県を挙げて取り組んでもできないようなイベントをやりまして、これがまた大好評をいただきまして、特に招待した県人会の皆さんに、山梨の農業というのを、多分見直してもらえたんじゃないかと。

農業者というのは何ができるか、私たちはその時に試されたような気持ちがあったんですが、やっぱり有機農業に取り組んでいる人たちはアイデア、活力があるんだなということで、我々もそのイベントをきっかけにまた気持ちを新たに、次の機会をまた狙っているわけなんです。

それで我々は孤軍奮闘で、20年もかけてやって来て、やっと今度立法がされたんですよ。

だからここでまた放っとけないよと立ち上げてもらって、有機農業を推進することで実は子供の問題とか、安全な食物とか、みんな大切なそういう輪の中にあるんだということ、何か時代の中で今これがピッと立ち上げる、いいチャンスじゃないかと思うんですよ。

そうすることによって、僕は山梨の田舎が豊かになって、子供が良い子供に育って、日本一の果樹産地のモモ、ブドウ、これが維持できる、何かそういうきっかけになると思うんですよ。

だから一番先に、一番農薬を使っているんだという県で見本を示して、一番厳しいとか何とか、放っとけない農政をここで一つ起爆材みたいな感じで、ああ、山梨はすごいなというようなトップセールスを立ち上げてもらいたいと思うんですよ。

僕は本当に、この有機農業は全ての県民が豊かな、そういう県づくりに繋がっているような気がするんです。

そうすれば村のお祭りも賑やかに、子供も子供らしく、そういう地産地消の物もスムーズに浸透するんじゃないか。

まさにこれが行政でやるべき、今そういうチャンスじゃないかと思うんです。

是非一つよろしくお願いします。

〔知事〕

分かりました。

〔参加者〕

山梨市でモモとブドウを作っています。やまなし自然塾に所属しています。

県の試験場がせっかくありますから、ああいう所で化学農薬に代わる何か自然の資材を使った試験的なことを、せっかく有機栽培という一つの法律が出ましたので、県の施設も

そういう方向に多少でも変えてほしいというのが私の気持ちです。

[参加者]

私は、15年ほど前に神奈川県から山梨に来ました。イラストとか本の仕事をしております。

15年ほど前までは机の上で仕事をしていたんですが、ある日、これじゃ何か生きている感じがしないと思いまして、ちょうど夕刊を開きましたら山形県の方で高畠という所の有機の里という、そこで1週間の研修があるということで、「共生塾の農学校」というのがありまして、それに急に参加したんです。

2万円という予算で1週間、3泊ぐらいは古い農家を改築したような所で合宿をして、そしてあと3泊、4泊はファームステイといって農家の皆さんのお宅に泊めていただいた。

それで一緒に行った仲間は、第一期生で20人ぐらいたんですが、10人ほど今も向こうに移住をして、農家としてかなり実績をあげているそうです。

私も描く絵が変わってきて、このような農村の絵とか、外に出てゆくようになりました。やっぱり受け入れてくれるということがすごく嬉しかったんですね。

都会の者にとって、農村で、みんなすごく親切で、1週間ですからいろいろ厳しいこととか分からないんですが、そのあとずっと田植えをしに行ったりとか、10年たってやっぱり仲間同士で繋がっているんです。

その施設などは、そんなにいい施設じゃなかったんですけども、やっぱり受け入れて人だなと思ったんですね。

立派な施設じゃなくてもどんどん受け入れちゃえば、結構都市の人は農村の人が思っているような立派な施設よりも、普通の生活にずっと溶け込んで受け入れてくれると、何かすごく嬉しくなるので、そういうことを山梨県もどんどん受け入れるといいなと思いました。

何かイタリアとかフランスとかという所は農村が豊かで、制度が色々違うと思いますが、だれとかさんのソーセージで、だれとかさんのワインで、お塩はだれとかで、こうやって食べてほしいみたいな、そういう地域文化が確立していて、山梨もすごく皆さんばらばらにいい物を作っているだけけれども、一度に食べられない。何か食べられる所が少ない。

まとまって地域の物が食べられる箇所とか、料理の場所とかね、そういう所があると、すごくみんなが入って来やすいだろうなと思います。

[参加者]

本業は大学の教員なんですが、先ほど人を育てる有機農業という話が出ましたけれども、大学で人を育てる研究員をやっております。

それで是非お願いしたいと思っていますのが、既存の都市の中で有機農業の推進をしようと思うと、色んなしがらみがあったりとか、今までの過程があって非常に難しいと思

ますので、それにもってきて有機農業というのは農業だけではなくて、食の安全、安心、環境、食育、子育て、教育、地域づくり、あと環境とか、色んな分野にまたがっていますので、この際、有機農業を推進するために色んなセクションを横断的に含むような、新しい有機農業推進室というようなものを、是非全国に先駆けて作っていただいて、積極的に山梨は有機農業で人をつくるんだよ、地域をつくるんだよ、食べ物もという、そういう何か新しい風を山梨県が是非吹かしていただきたいと思っています。

よろしくお願いします。

[参加者]

僕は今みんなが言った事をちょっと絵にしてみたんですが。

それで、一つだけ多分入っていなかったものが、健康の問題です。

みんな食べ物を食べて元気になったというのは、きちんとした科学的な研究をしなければいけない。

山梨は、環境科学研究所という素晴らしい機関があるので、僕らも塾で講師で呼んだりしているんですけども、有機農業というのは山の上だとか下だとか、いわゆる斜面の近い中山間地が多いんですね。

そこには森もあったり、そうすると森の研究をしている先生がいたりとか、虫の研究も環境科学研究所がやっていますよね。

だから、山梨の特徴ある研究をやっている機関があって、なおかつ、そこ有機がくっついてくると、もっと面白い有機農業に関する研究の、何か国中に発信できるようなものが作れると思うんですね。

それから、県の果樹試験場で研究したものもすごくいいですよ。

それもやってもらいたいんだけど、農家の、それぞれ現場でやっている農家に行って、試験場の先生たちと一緒にチームを作る。これがすごい大事なんですね。

実は、有機に関しては試験場より農家のほうが犠牲も多いし、試験もいっぱいしているんですよ。

そのところを現場に入ってもらって、一緒にやっていただきたいなど、この2つを最後をお願いしたいと思います。

[司会]

それでは知事さんのほうでまとめて、感想も含めて一言お願いいたします。

[知事]

色々盛りだくさんのお話をお聞かせいただきまして、ありがとうございました。

皆様方がそれぞれに特色を持ちながら、この有機農業という問題に取り組んでおられる。

本当に改めて、皆さん方の長年のそういうご努力に対して敬意を表したいと思います。

色んなたくさんのお話があったわけでありまして。先生がおっしゃったように、化学肥料は使わないでも十分通常の花、果物はできるんだと。

これはまさに栽培技術の問題でありますし、あるいは病害に強い品種改良をしていかなければならない。

そういうことも含めて、やっぱり県の試験場でそういう技術開発を進めなければいかんという課題が当然あると思いますし、また給食を初めとして、やはり有機農産物を子供たちが積極的に食べるように、対応を試験的にも設けて、そういうところからこれを広げていくべきではないかという大変貴重なご意見もありましたし、色々なご指摘をいただいたわけでありましてけれども、何にしましても山梨県政がこの有機農法というものにもっと強い、深い関心を持って、そして山梨から情報を発信するようなつもりで是非がんばってもらいたいと。

こういう皆様の共通した思いがあることを、大変に熱いものを感じたところです。

色々な、他にも大変な、たくさんのご指摘をいただきましたけれども、それぞれ持ち帰って検討してみたいというふうに思いますけれども、農業の分野で、ついさっきは若い果樹栽培をやっている農家の皆さんに聞きますと、やっぱり彼らは彼らで非常に価格が低下をし、そういう中でどうやってコストパフォーマンスを高めて生産性を上げていくかという苦勞をしているという方々もおる。

しかし、一方で有機農法ということに努力をしておられる方もいるわけだし、農業も非常に幅広さがあるわけでありまして、有機農業というものの農政における重要性というものは十分認識をしながら、これからやっていきたいというふうに思っておりますので、今後は是非色々とお知恵を貸して下さいますように、よろしくお願いを申し上げたいと思います。

本当に皆さん貴重なご意見を賜りましてありがとうございました。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

(拍手)

〔司会〕

お話は尽きないんですが、ここで終了させていただきます。

今日はありがとうございました。